

雨が多い時期ですが、防除は十分にできているでしょうか？各種病害が発生しやすい時期なので、本誌を参考に薬剤防除等を徹底してください。また、本年は気温が高く推移してきたことから害虫の増殖に好適であると考えられます。圃場をよく観察し、防除適期を逃さないようにしましょう。

露地カンキツ

●黒点病

6、7月には雨が多い時期ですが、計画的な防除は行えているでしょうか？本病を抑えるポイントは、①伝染源の除去、②定期的な薬剤防除、③雨が多い場合には累積降雨量を目安にした薬剤の追加散布、であり、散布のタイミングを逸しないようにしましょう。

枯れ枝や園内に放置された剪定枝などは園外に持ち出し処分するようにしてください。枯れ枝は1回のみならず随時撤去することでより本病の発生を抑えることができます。また、園内に残っている切り株等があれば、伐根するかポリ袋で全体を覆う等して菌の飛散を防止してください。

薬剤は、マンゼブ水和剤（ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤）、またはマンネブ水和剤（エムダイファー水和剤）を使用します。散布後は累積降雨量を目安を 200～250mm とし、追加散布を行ってください。雨が少なく累積降雨量を目安に達しない場合は、1カ月間隔で散布します。なお、マシン油乳剤は7月以降に使用すると果実の糖度低下や果実腐敗を助長する場合がありますので、加用は6月までとしてください。

累積降雨量は各ほ場によって異なるため、ほ場ごとに簡易雨量計を設置して確認することが望ましいです。梅雨時期は降雨が続きますので、目安の累積降雨量を超えそうな場合は、雨の合間を縫ってでも散布を行ってください。

●かいよう病

本病は風雨によって周囲に感染が広がります。梅雨時期は本病の重要な防除時期となりますので、本病にかかりやすい品種（中晩柑類、高糖系温州）では7月上旬頃に薬剤防除を行ってください。また、温州ミカンであっても、昨年本病が発生した園、風当たりが強い園、幼木や高接ぎ園では、感染拡大のリスクがあるため同様に薬剤防除を行います。

薬剤は、コサイド 3000 2,000 倍やムッシュボルドーDF 500 倍、クプロシールド 1,000 倍

等を使用します。なお、銅による薬害（スターメラノーズ）の発生を抑えるため、いずれの薬剤にもクレフノン 200 倍を加用してください。

台風襲来等の強風雨が予想される場合は、7 日前～前日までに上記の薬剤で防除を行いましょう。襲来後の薬剤散布は防除効果が劣りますので注意してください。

また、ミカンハモグリガによる被害痕は病原細菌の侵入口となるため、本病の感染を著しく助長します。そのため、本病が問題となる園ではミカンハモグリガの防除も徹底してください。

●ミカンサビダニ・チャノキイロアザミウマ

7 月中旬はミカンサビダニとチャノキイロアザミウマを同時防除する適期です。コテツフロアブル 4,000 倍、アグリメック 2,000 倍、ハチハチフロアブル 2,000 倍等を散布します。

●カイガラムシ類

近年、各種カイガラムシ類の発生・被害が多くなっており、試験場への問い合わせも多くいただいているところです。第一世代幼虫を対象とした防除は適期（5 月下旬～6 月上旬）にできたでしょうか。7 月中下旬頃はマルカイガラムシ類やイセリアカイガラムシ等の第二世代幼虫が発生する時期にあたりますので、園内の発生状況をよく観察し、遅れないように防除を行ってください。

薬剤は、モスピラン SL 液剤 2,000 倍、エルサン乳剤 1,000 倍、トランスフォームフロアブル 2,000 倍等を散布します。また、散布の際は、薬剤が到達しにくい部分（果実と葉・果実の接合部等）にも薬液がかかるように丁寧に防除を行ってください。

●ゴマダラカミキリ

本虫は、若齢幼虫期を過ぎると幼虫が木部に侵入し、防除が困難となります。被害を抑えるためには、成虫が産卵する時期（産卵最盛期 6～7 月）および卵～若齢幼虫期に薬剤散布を行うことが重要です。若齢幼虫期の 7 月中旬までに、モスピラン SL 液剤 2,000 倍、エルサン乳剤 1,000 倍、ダントツ水溶剤 2,000 倍等を散布します。なお、地際部に産卵する傾向が強いため、樹幹から地際部を中心に散布しましょう。

また、成虫は捕殺するとともに、特に幼木園では産卵防止のための防虫ネットを主幹の地際部に設置したり、薬液が到達しやすいように除草を行う等しましょう。食入してしまった幼虫に対しては、捕殺するか食入口の木くず等を除去した後に園芸用キンチョール E や

ロビンフッド等で対応します。

ハウスミカン

●アザミウマ類

園内外の雑草等で増殖したアザミウマ類がハウス内に侵入して被害を発生させます。そのため、着色前に園内外の除草を徹底するとともに、ハウスサイドに防虫ネットや光反射資材を設置し、ハウス内へのアザミウマ類の侵入を防ぎましょう。既に設置している園では、ネットに破れ等がないか確認しましょう。

アザミウマの種類によって効果の高い薬剤が異なります。収穫前日数に注意しながら発生種に応じた薬剤を選択しましょう。使用する薬剤については、5月号を参照してください。

不知火

●汚れ果症

施設栽培の‘不知火’では、赤道面から果頂部に集中して黒点症状を生じる「汚れ果症」が問題となります。本症状は、高湿度条件で発生が多くなるため、換気などの湿度対策を十分に行ってください。また、薬剤ではマンゼブ水和剤が有効です。露地栽培の黒点病防除と同様に、前回散布から累積降雨量 250mm または散布後1カ月を目安に散布すると効果的です。

ナシ

●黒星病

本病の防除はうまくできているでしょうか？6月下旬から7月上旬は果実が黒星病に最も感染しやすい時期ですので、気を抜かず防除対策を行いましょう。この時期は、スコア顆粒水和剤等のDMI剤を必ず散布するようにしてください。

また、①葉に本病が発生している園、②6月下旬～7月上旬の防除以降、降雨が続く場合、③毎年収穫時期に被害が発生する園では、7月中旬～8月中旬にも再度DMI剤を散布してください。

●ナシヒメシンクイ

殺虫剤の散布間隔が空くと発生・被害が多くなるため、散布間隔が10日以上空かないように防除を行ってください。

交信かく乱フェロモン剤を設置している園でも、園外から交尾済みの雌が侵入して被害が発生する場合がありますため、10～14日間隔で防除を行います。なお、‘幸水’では果実に薬液の汚れが残りやすいので、フロアブル剤を使用しましょう。

●ハダニ類

本年は暖冬に加え、その後も気温が高く推移したことから、一部ほ場では早い時期からハダニ類の発生がみられました。一般には梅雨明け頃から発生が多くなりますので、今後の発生に注意し低密度時からの防除を徹底しましょう。なお、薬剤は、収穫時期が近いことから果実の汚れが少ないコロマイト水和剤 2,000 倍やスターマイトフロアブル 2,000 倍等を散布します。

また、令和5年に当試験場で実施した薬剤感受性検定結果（表1）を掲載しますので、今後の防除の参考としてください。

表1 加温ハウスナシで採集したカンザワハダニに対する各種殺ダニ剤の感受性(2023年5月30日採集)^{a)} (佐賀県果樹試験場調査)

採集地点	供試薬剤 ^{b)} 供試濃度 IRACコード	補正死虫率(%) ^{c)}									
		サンマイト WP	ダニトロン FL	コロマイト WP	パロック FL	カネマイト FL	ダニゲッター FL	スターマイト FL	ダニサラバ FL	ダニコング FL	ダニオーテ FL
		4,500倍 21A	6,000倍 21A	6,000倍 6	6,000倍 10B	3,000倍 20B	6,000倍 23	6,000倍 25A	3,000倍 25A	6,000倍 25B	6,000倍 33
1		○	×	○	×	○	○	×	×	×	—
2		×	×	○	○	○	○	○	×	×	○
3		×	×	○	○	×	○	×	×	×	×
4		○	×	○	○	○	○	○	×	○	○
5		○	×	○	○	○	○	○	×	×	○
6		○	×	○	○	○	○	○	×	×	○

a)採集地:佐賀県伊万里市大川町、南波多町の現地圃場

b)供試薬剤の剤型は、WP=水和剤、FL=フロアブル剤

c)補正死虫率=(無処理区の生存率-処理区の生存率)/無処理区の生存率×100。補正死虫率が高いものほど効果が高いことを示し、80%以上のものを○で網掛けし、80%未満のものを×とした。

●ハウスの収穫後の薬剤防除

収穫が終了したら、黒星病や炭疽病などを対象としてデランフロアブル 1,000 倍やキノンドーフロアブル 1,000 倍などの保護殺菌剤を散布します。ハダニ類等の害虫の発生が多い園では、殺ダニ剤を加用してください。

ただし、近隣に収穫が終わっていない園地がある場合は、薬液が収穫前のナシにかからないよう、飛散に十分注意して散布を行ってください。

ブドウ

●枝膨病

袋掛け後に本病に効果の高い薬剤で防除を行うことが重要です。袋掛け後の防除をまだ行っていない園では、ストロビードライフフロアブル 2,000 倍を早急に散布してください。

●べと病

曇雨天が続くと発生が多くなります。本病は、一度発生すると抑えることが難しくなるため、予防散布に努めてください。

薬剤は、ボルドー液（I C ボルドー48Q、66D）50 倍を散布します。なお、I C ボルドーにアビオン E 1,000 倍を加用すると防除効果が向上します。薬剤の散布間隔は 20 日以上空かないようにしてください。

キウイフルーツ

●果実軟腐病

せん定枝、枯枝等は伝染源となるため、園外で処分してください。薬剤は、フロンサイド S C 2,000 倍（収穫 30 日前まで）、アリエッティ水和剤 600 倍（収穫 120 日前まで）、トップジンM水和剤 1,000 倍（収穫前日まで）等を使用し、果実だけでなく枝葉にも十分薬液が付着するよう丁寧に散布します。フロンサイド SC やアリエッティ水和剤を散布する場合は、収穫前日数に注意してください。

●すす斑病

6月に引き続き、7月も果実への感染を防ぐための重要な防除時期です。ベンレート水和剤 2,000 倍、ダコニール 1000 500 倍、ストロビードライフフロアブル 2,000 倍等のいずれかを散布します。果実だけでなく、葉の表裏、棚面の上の方にある枝先にも薬液がかかるよう丁寧に散布してください。特に、枝が遅くまで伸びているような樹では発生が多くなるため適切な新梢管理を行ってください。

※キウイフルーツは、品種によって使用できる薬剤に制限があるため、暦や関係機関の指導に従って薬剤を使用してください。